

## 世界遺産論

第5章 ヨーロッパ中世とルネサンス、大航海時代

第7章 近代国家の成立と世界の近代化

### ヨーロッパの建築様式

#### ギリシャ建築（古典様式）

ヨーロッパ建築の起源ともいえる建築様式。紀元前8世紀頃は木造であった。柱周りなどの細部の装飾や黄金比を用いたデザインが特徴。

（パルテノン神殿：アテネのアクロポリス）



#### ローマ建築（古典様式）

ギリシャ建築を芸術的な模範として受け継ぎつつ独自に発展させたローマ建築は、円形闘技場や公共浴場、水道橋などの公共施設が特徴。アーチ構造やドーム天井など、高い土木・建築技術が伺える。

（ポン・デュ・ガール ローマの水道橋：2級対象）



#### ビザンツ様式

4世紀頃、アナトリア（現トルコ）でローマの建築技術と東方文化が結びついて発展し、6世紀ごろに最盛期を迎えた。バジリカなどの聖堂建築にドーム天井美を組み合わせている点も特徴。内部はモザイクや大理石で装飾されており、後のイスラム建築にも影響を与えた。

（サン・マルコ大聖堂：ヴェネツィアとその潟）



#### ロマネスク様式

ロマネスクとは「ローマ風」という意味で、ローマ建築のバシリカを発展させた様式。10世紀頃のキリスト教の終末思想が広がった時代に発展した。石造りの厚い壁や小さな窓、半円アーチ構造の天井などが特徴で、扉の上の半円形のタンバンや柱頭にレリーフが描かれている。

（ピサの大聖堂：ピサのドゥオーモ広場）



#### ゴシック様式

ゴシックとは「ゴート風」という意味で、建築技術の向上により可能になった軽やかで明るい様式。パリを中心に発展した。天井の高さと光を追求しており、建築そのものが「神は光りなり」というキリスト教の世界観を表している。

（ノートル・ダム大聖堂：パリのセーヌ河岸）



## 世界遺産論

第5章 ヨーロッパ中世とルネサンス、大航海時代

第7章 近代国家の成立と世界の近代化

### ルネサンス様式

ルネサンスとは「再生」という意味で、古代ギリシャやローマなどを模範とした15～16世紀の様式。幾何学図形を用いた左右対称の造形や直線が特徴。

(サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂：フィレンツェの歴史地区)



### バロック様式

バロックとは、ポルトガル語の「ゆがんだ真珠 (バロック)」に由来する。大航海時代に栄えた、過激な装飾や凹凸の協調などを特徴とする様式。

(ヴェルサイユ宮殿：ヴェルサイユ宮殿と庭園)



### ロココ様式

バロック様式の延長線上にある、軽快で優美な室内装飾が特徴の様式。貝殻や植物紋様、紋章の縁取りなどを組み合わせたモチーフや、曲線、淡い色彩などの他、壁面と天井に境目がない構造も特徴。

(サンスーシ宮殿：ポツダムとベルリンの宮殿と庭園)



### 新古典主義様式・歴史主義様式

古代ギリシャやローマの古典様式を再評価した様式。18世紀後半から19世紀初頭にかけて、バロック様式やロココ様式の過激な装飾性に反発した西ヨーロッパで流行した。

(ウェストミンスター宮殿、ウェストミンスター・アビーとセント・マーガレット教会)



### 近現代建築

産業革命によって誕生した鉄やセラミックなどの新素材を用いた自由な造形。

(カサ・ミラ：アントニ・ガウディの作品群 2級対象)

